五省訓
1.至誠に悖るなかりしか。
1.言行に恥ずるなかりしか。
1.気力に欠くるなかりしか。
1.努力に憾みなかりしか。
1.不精に亘るなかりしか。

五省会ニュース

発行所
医療法人財団五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL (0764) 41−2481(代)
発行人　西能 正一郎

創刊にあたり

西能 正一郎

長い間、私の心の中に温めてきました新聞をつくる夢がようやく実現する運びとなり、こんな嬉しいことはありません。この機会に新聞に寄せる私の願いを述べて、「五省会ニュース」発刊第一号のご挨拶といたします。

「医療は患者さんの為にあり、病院は患者さんの利用があって初めて存在価値を持つ」というのが、私の病院運営に一貫してきた理念で、職員諸君にも徹底して、皆さまのより有効なご利用を願ってきました。

実際には、病院としても経済社会の一員であることには変わりなく理想とはほど遠い現状でありますが、それでも、なにがしの工夫と努力を重ねてきました。このニュースを通じて私たちの病院の患者さんのためになっている色々な工夫を一層ご理解いただき、上手に私たちの病院を利用していただきたいと願うものであります。

時あたかも富士見病院の不幸なニュースがちまたに流れています。その報道の一端を読むにつけ、ここまで医療の尊厳を損った病院管理者は論外として、ジャーナリズムをはじめ一般の人たち、そして患者さんが如何に医療の仕組みについて無知であるかを如実に物語っているように思われます。

正しい医療の理解を

ヴェールに包まれていた医療が次第にはがれて、一般にその姿を現わそうとしている時代であると思います。そのはがれかたが平均していないために誤解が生じたり、問題が起きたりしやすいのではないでしょうか。

今や、病気になる前の医学が重視される時代です。即ち予防医学こそが、これからの医学の主流にならなければなりません。

この目的のために、当病院では医療相談コーナーを設けましたが、この紙面でも、予防医学、健康管理のスペースを作ります。

主手に医学を利用していただき、医療を受けないですむ人たちを一人でも多く増やしてゆくことが私たちの務めであります。

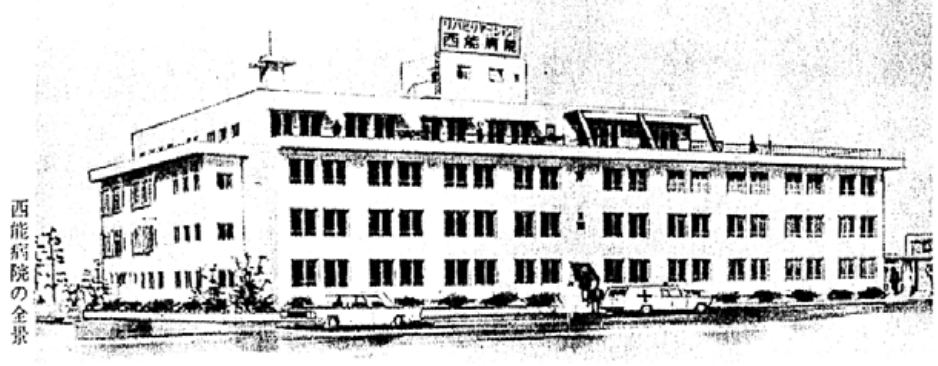
私は、この紙面が少しでも皆さまに医療を正しく理解していただくための場としてお役に立つことを願うものであります。

私たちの病院では、百人余の職員が医療奉仕という特殊な仕事とかかわりをもっております。一人一人の持つ喜びも悲しみも又特殊な面が多いのであります。彼らの息吹きを紙面に反映させ、生き甲斐をかみしめ合いながら立派な医療人として生長してゆくのも私が本紙に求める側面的な目的であります。この新聞を上手に育ててゆくことを願ってやみません。

医療法人として

充実した総合施設で奉仕

私たちの西能病院は昭和五十五年十一月一日で医療法人に生まれ変わってから満一周年を迎えました。そして、これまでの整形外科、リハビリテーション科に加えて内科、形成外科や各種医療を新設、総合医療施設として地域社会の皆さまにご奉仕するため日々努力しております。「五省会ニュース」の創刊を機会に、個人病院を医療法人に改めました理由や特色などについてご説明を申しあげます。



西能病院の全景

昨今、当病院を利用される患者さんは、入院外来をあわせて年間十万人を数え、診療圏は県下一円のみならず、県外にも及んでおり、第一線の基幹病院としてご期待をいただいております。

病院の職員も、医師団をはじめ百人を超える大世帯になり、病院運営の安定化が職員の生活安定に結びつく社会的責任が問われる規模になってまいりました。

このように、対外的にも対内的にも、この病院に課せられている使命は、あまりにも重く大きくなりました。そこで、個人病院の能力で処理する限界を超えていると判断し、医療法人に改組した次第であります。

このため、西能個人が所有していた病院建て物及び施設、医療機械器具などの一切、ならびに運営基金の一部を医療法人財団五省会に寄付し、医療法人設立後の病院経営は、法人の役員、評議員の合議制により適正に運営されています。

公正、適切な運営

自由診療単価一点十円に

また、法人としての組織力と実力を備て、これまで以上に公正で適切な医療を実施し、皆さまに奉仕する病院運営を行なっています。

これからも、役員、評議員がそれぞれの立ち場で全面的に協力し、英知を結集して病院の近代化を図り、地域住民の医療福祉の向上に貢献いたします。

病院の特色は、医療業務の公益性に立脚し、医療法人化と同時に、交通事故や私費の方々の治療費の自由診療単価は一点二十円から、健康保険と同額の一点十円にいたしました。

一方、入院管理料の全廃など、地域、社会のお役に立つ病院運営に最善の努力を重ねております。

あすなろ

▼富山市から出ている「ん」という文芸同人誌がある。その中に、木崎恵美子という筆名の同人が毎号小説を発表している。

彼女の住所は東北の港町・塩釜の病院。原因、治療法ともに不明の難病「多発性硬化症」で入院中の身だ▼六年前、二十一歳のOL時代に彼女は突然激しい全身マヒに襲われた。その後少し回復したが下半身はコチコチに石のように動かなくなっていた。彼女は生きる希望を失った▼このとき彼女を叱ったのは主治医である。まず、病気は治らないことを告げてから厳しく命じるようにいった。

「残された機能を生かして生きるのです。手が動くではないですか。絵か小説を書きなさい。ともかく動く間は書き続けるのです」▼彼女は小説のペンを持った。北日本文学賞最終予選に残ったのがきっかけで富山の仲間と文通が始まった。彼女はこの主治医とのめぐり逢い、同人誌「ん」とのめぐり逢い、いや、この不治の難病もすべて人生の不思議なめぐり逢いだと思った▼そして月刊雑誌「いんなあとりっぷ」が全国公募した人生論賞に「人生のめぐり逢い」というテーマで応募、見事入賞した。選者の一人、黒岩重吾氏はこう評している。「彼女は運命を一度突き放してから手許に引き寄せている…（中略）だからこの作品には人間の生命力が息づいている…」▼彼女は今日も右手の親指と人差指にペンをはさんで必死に書いているだろう。そう思うだけで、生きようとする若い生命の健気さに胸の熱くなる思いがする。

施設のあらまし　西能病院

基準看護特一類、基準寝具、基準給食、身体障害運動療法施設（リハビリテーション）などの承認を受けていますので、わずかの準備で充分に療養生活を送ることのできる病院です。

保険医療機関、生活保護法、結核予防法、原爆被爆者一般疾病医療機関、労災保険医療機関等々の指定を受け、救急病院の認定、更に厚生省より更生医療、育成医療の指定病院とされていますので、各種の福祉の援護を受けて療養することができます。

待合ホール

1F　待合ホール・医事室・診察室・病歴室・X線室（透視室、断層X線撮影室、一般撮影室、暗室）ギプス室・救急室・リハビリテーション部（理学療法室・訓練室・ADL室・水治療室）栄養部・売店・喫茶ルーム・ボイラー室・電気室。

2F　病床62・重症患者観察室・ナースステーション・食堂・面会・休憩室。

患者食堂兼面会室

ナースステーション

3F　病床54・救急病床・重症患者観察室・ナースステーション・個室・特別病室・食堂・面会・休憩室。

4F　手術室・中央材料室・薬局・倉庫・医局・会議室・管理棟図書室・洗濯室。

会議室

目指して ばっとります

生きる〝闘いの場〟

リハビリテーション

より社会のためになる生命を――。西能病院のリハビリテーション科で、訓練をうけている患者さんは入院外来あわせてやく百人。このうち訓練専門が二十人（うち外来五人）。これを受け入れる訓練室のメンバーは、患者さんを見守るのではなく、関係者が一団となって温かく働きかけ、一心同体で身体的、情緒的、社会的潜在能力を最大限に発揮できるよう引きだすのがねらいだ。患者さんに〝忍耐〟と〝根気〟の明け暮れは、まさに〝生きる〟ための、きびしい闘いの場だ。荒井リハビリ課長は「訓練士にはプロとしての愛情が、なによりも必要です。私たちは患者さんの気持ちになって、機械器具にたよらない〝マンツーマンシステム〟での訓練を大切にしています」と強調する。以下は訓練また訓練にはげむ不撓不屈の、けなげな姿だ。

一人歩きに感激

○……細入村楡原、森喜一郎さん（六七）は、手足や、からだが動かない頚椎脊髄症で、昨年十一月に他の病院で頚椎の固定術を受けた。そして、リハビリテーションの目的で、ことし三月二十九日西能病院に入院した。主にマット運動と歩行訓練だ。ほかにもハリ治療やいろんな訓練がある。午前八時半から岡十一時まで、午後二時から岡五時まで、みっちり組まれている。五月半ばから松葉杖で一人歩きできるようになった。「暖し派がこぼれてしまうがなかったわい」とおっしゃる。いまでは畳さ15㌢の障害物がまたげると、大喜び。「みなさんの熱意に、いやでも、おうでも引っぱられちゃ。なまくらもんでも、やる気になる。苦しくないといえばウソですわい。でも、わしは休んだのは、微熱を出した半日だけだちゃ」

ふれあいを大切に

○……加賀市片山津温泉三又森岡、左登ちよさん（七四）が入院したのは昨年の五月。パーキンソン氏病といって、手足がかたくなり手指がふるえて、一人歩きが困難な病気だ。マット訓練と歩行訓練が重点。ほかに全身浴、訓練浴、機具訓練もある。出たり入ったりして、今年八月二十六日に四度目の入院をした。いまでは、どうにか、一人歩きできるようになった。「家にいると、無性に病院へいきたくなるのですよ。先生方や、みなさんが親切で心の励みになり、患者さんと仲よくなれるのも楽しみです。心のふれあいを大切にしています。訓練中は一生懸命なので、いまでは苦しいとは思わなくなりました。全身麻酔のもとに腰椎固定術を受けた。ベッドでの安静臥床のあと、八月二十四日から連日ハリ治療を受けている。「すべて院長先生におまかせしてやっていった」と喜んでいる。一日も早く治って、息子たちに田んぼにでるのが楽しみだ。」

大門さんの態度は、すっかり落ち着いている。

下肢痙性に対してのハリ治療の森さん

下肢の疼痛及び、しびれに対する電気治療の大門さん

四つ這位で、平衡反応及び、重心の移動練習の左登さん

リハビリテーションは

整形外科と中の両輪のような立場にあり、後遺症や重症の身体障害に苦しんでいる人々に対して、「もし可能ならばその障害を除く」あるいは、「できるだけその障害を軽くする」また、「もし回復の見込みのない人は残されたその機能を最大限に活用できる生命を甦らせる」訓練し、再び社会のためになることを目的とする医学です。

わたしはこう思う

―西能病院の発足は昭和37年と聞きますが、そのころのリハビリテーションに対する一般の認識はどうでしたか。

――まあ一口にいって、富山ではリハビリなど考える時間はなかったかもしれません。交通災害もいまほどでなかったし、ときたまそうした患者が入院しても、そのころは治療する、そのあとはマッサージという程度だった。私がリハビリ施設をつくるため、全国の施設を回りましたが、当時は心、八カ所ぐらいしかありませんでした。

――北陸では初めてのリハビリ施設だったそうですね。開設のきっかけはどのようなことからですか。

――実をいうと、骨折の患者さんでも治療しますし、どうにか骨がくっつくと、そのあとは、四肢で治ったというのが当時の考え方でした。ヒザが曲がらないのがあたりまえといった原則でした。

――骨はくっついた。病気は治った。あとはあなたで生きていきなさい……。

――「そういうことです。あとの問題が医療の中に取り組まれていなかったわけです。これではいけない。本来の病気は治っても、それから日常生活をしていくまでの間に、もう一段階、医療としてやることがあるんじゃないか、こうあるべきだ、ということです。ちょうどアメリカでは是非はリハビリが進んでいて学問として体系づけられていたことが勉みになりました。将来、日本の医療は必ずこうなってくる。そのとき、公的病院ならいつでも予算がついて施設の準備はできるだろうが、個人病院がそれと競争していくには、前もって走っていなければ追いつけないという思いもありました。とにかく当時は病気が治ったら、あとは社会復帰しようがすまいがこちらは関知しないというようなどの医学の幅だったといえるでしょう。

――しかしここ10数年、リハビリの認識が非常に高まった。第三の医学とか、日本医療の最先端といわれるまでになりました。こうまく融和させていく働きを、リハビリに求めているわけです。しかし現状は厳しいですね。正直にいって過院した患者さんがその後どのような生活をしておられるか、そこまで手が回りません。それで、私は患者さんによくいうんですよ。〝病院は監獄と違って何回もいったりきたりしてよいんですよ〟。しかし患者さんにすれば、病院へいくということは、気がね、世間体をどださまざまなことがあっていきたくてもいけない。結局、地域に戻ったら、地域の施設で相談しながらやっていくことになるんです。その場合、私のところでやった処方箋をそこの施設へ提出しても受け止めてくれるだけのものがまだないといってよいんじゃないか。ですから、リハビリ病院からその先には問題が残っているというんです。

「それからもう一つ、日本では患者さんがリハビリにぶらさがりすぎるといえばいえばすぎるといえます。アメリカをみてきた先生の話ですが、アメリカでは入院料が高いから、早く治して早く退院しないと一家離散の浮き目にあう。ですから、患者自身が社会復帰に非常に意欲的だそうです。一般にリハビリは、治ろうとする意欲や社会に復帰しなければとの生活上の、止めておられますか。

「システムとしては大変結構だと思います。リハビリに限ってみると、この考え方は患者が社会に復帰してつながりをもっていく自分の社会環境と自分の障害をうまく融和させていく働きを、リハビリに求めているわけです。しかし現状はまだ現実には困難があるんですね。正直にいって過院した患者さんが後どのような生活をしておられるか、そこまで手が回りません。それで、私は患者さんによくいうんですよ。〝病院は監獄と違って何回もいったりきたりしてよいんですよ〟。しかし患者さんにすれば、病院へいくということは、気がね、世間体をどださまざまなことがあっていきたくてもいけない。結局、地域に戻ったら、地域の施設で相談しながらやっていくことになるんです。その場合、私のところでやった処方箋をそこの施設へ提出しても受け止めてくれるだけのものがまだないといってよいんじゃないか。ですから、リハビリ病院からその先には問題が残っているというんです。

「それからもう一つ、日本では患者さんがリハビリにぶらさがりすぎるといえばいえばすぎるといえます。アメリカをみてきた先生の話ですが、アメリカでは入院料が高いから、早く治して早く退院しないと一家離散の浮き目にあう。ですから、患者自身が社会復帰に非常に意欲的だそうです。一般にリハビリは、治ろうとする意欲や社会に復帰しなければとの生活上の、

地域社会に医療奉仕

特色ある医療活動を展開

医療法人財団五省会
理事長　西能病院
西能　正一郎

れは医学医療の大きな前進だと思います。そこで、私たちはリハビリをどう理解すればよいんでしょうか。

リハビリの意義についてわかりやすくご説明を……

「そうですね、治療によって病気が固定します。つまり治療の効果がなくなってから、いかにしてその人を社会の一員として送りだすかということに存在意義があると思います。もちろん、病状によっては完全に社会人として生活していけない場合もあるわけですが、せめて自分の生活範囲ぐらいは自分で始末できるまでにもっていく。

――なるほど、リハビリの役割、意義はよくわかりました。ところで、富山県では包括医療体制として、健康管理のシステム化―疾病管理のシステム化―リハビリテーションのシステム化―健康管理のシステム化と、円形の仕組みができていますね。これをどう受け止めていますか。

私は、患者さんとドクターの信頼関係のうえにたって医療をやらせてもらっているし、またやっていくものでなければならないと確信しています。マスコミの皆さんは、確かに現実にあったことを報道しているを揚った、血液検査をしたりして補って診断をくだす、治療方針をたてる、というのが医療の本来のあり方だと思います。ところが現実には、五感を無視して、よい方向付けに力を入れてできたデータだけで勝手に病人をつくりあげかねない。はじきだしたデータを、さて何病かな？では、患者不在の診断、治療ということになります。私は院内では病院の先生方によくいうんですよ。〝患者さんの顔をみて病名をつけてください〟。回診、寝交の際にはすべての受持ち患者さんに声をかけ、手をふれるようにって。まあ、M.E機器はこれからどしどし進出してくるでしょうが、よっぽど気を付けていないと、とんでもないことになりそうですね。富士見病院事件なんかは、まさにM.E機器の落とし子のようなものです。

――富士見病院事件といえば、これをきっかけにマスコミの医師攻撃は大変な過熱ぶりですね。一人の医師としてどう受け止めておられますか。

「一つの不祥事件が報道されると、私たちにもほぼ同じウエートで圧力がかかってくるように思えます。そのようなことを、あなたもいうんじゃないか、といった不信感ですね。しかし、日本中の人が不信感を抱けば、日本の医療はそれこそ荒廃するでしょう。

患者をまず五感で診る

問題はらむME機器の使用

ニードが、その効果に大変影響します。この点、日本は社会福祉が進み、甘えていてもなんとか食べていける状態。こうしたことが、ある意味でリハビリ効果を減退させる要因になっている気さえします。

――話は変わりますが、先生の医業経営についてのお考えをお聞かせください。

「病院は地域社会に医療奉仕するという義務があります。奉仕があって初めて患者さんの利用が起き、報酬をいただくことができるのだと思います。そのためには、医療部門はもちろん、すべての部門で、これだけは他に決して負けないというものを確立し、特色ある医療活動を展開しようと、いつもスタッフにいっています」

「そこで医業経営の問題ですが、医療奉仕に保険点数という仕組が決められたときから、国は奉仕の精神を否定したのだと考えます。それなのに、古き良き時代の〝医療の心〟を、経済を抜きにして残そうというのはナンセンスですね。

医療に対する何の政治的配慮もなきにすず、逆に医療法によいう手かず足かせをはめられて経済の嵐の中に立たされていながら、儲けることは罪悪であるかのごとき甘っちょろい考え方は、病院を危うくする思想です。しかし、どこかの社会のように、なりふりかまわず他人の迷惑やあとのことも考えないで、目先の利益だけを追うピラニアのような姿勢ではいけません。要は、正当な仕事をして正当な報酬を得、それが儲けになっても誰に恥ずることもないということです。儲けといっても、日進月歩の医療機器や設備に迎元される性質のもので、こうしないと最高の医療を社会に提供できません。

――いま医療機器の話がでてきましたが最近、高都医療機器に対する批判もあります。その論点の一つは、患者と医師の間に割り込むことによる人間疎外の問題、いま一つは機器が企業秘密性をもつことによって、医療の公開性をはばむということ、もう一つは医療費の観点から適正配置政策の問題をどです。いかがお考えですか。

「大変基本的なことですが、ドクターがまず患者さんを診るとき、何で診るかということが問題なんです。

――富士見病院事件といえば、これをきっかけにマスコミの医師攻撃は大変な過熱ぶりですね。一人の医師としてどう受け止めておられますか。

「一つの不祥事件が報道されると、私たちにもほぼ同じウエートで圧力がかかってくるように思えます。そのようなことを、あなたもいうんじゃないか、といった不信感ですね。しかし、日本中の人が不信感を抱けば、日本の医療はそれこそ荒廃するでしょう。

社会復帰を がん

訓練が心の励みに

○……いろんな訓練をうけている大門町小泉、山田清逸さん（六六）は、杖を使用して、立ったり坐ったりの立ちあがり訓練を何回も繰り返していた。脊髄腫瘍で手術をうけた。ものの表情だ。心と心が、そのあとも、手足がしびれて思うようにならない。とくに足が不自由だ。これを少しでも克服しようというのだ。ぎこちないが、その動作の一つ一つに社会復帰への意欲がみなぎっている。見守る訓練士も、真剣そのもの。不全麻痺。心と心が、がっちり結びついている。頭がきがる。「入院したのが六月二十八日、やっと歩けるようになり、杖で障害物訓練できるようになった。少しずつしびれが取れてきたような気もする。嬉しいですちゃ。先生方のご尽力におむくいしようと、手をのばしたり、足をのばしたりして、オラもがんばっとりますちゃ」。山田さんは、訓練が何よりも心の励みになるとつけ加えた。

ロフストランド杖を使用しての立ち上がり訓練の山田さん

歩行応用動作訓練で、障害物を渡る練習の保田さん

ベッドの上が寂しい

○……左片麻痺の富山市栗島、保田茂子さん（六六）は、杖を右手に障害物を渡る練習に一人で黙々と取り組んでいる。その姿にはまったく雑念がない。脳出血で倒れ、県立中央病院で三カ月間治療したあと、六月はじめに訓練のため入院した。左半身とくに手足が不自由だ。入院当時は坐ることも立てることもできなかった。それが、いまでは、杖を頼りに歩行訓練にこぎつけた。午前中はマット、午後は歩行と、連日の猛訓練のおかげだ。

「入院当時は手足がしびれてフラフラしていたが、いまでは、うんとよくなりました。訓練はつらいですが、骨身を惜しまず一生懸命にやっていただく先生方のお力ぞえには涙がでます。日曜、祭日の訓練のない日は寂しく、ベッドの上の時間が長いように感じます」。保田さんは、時間がもったいないといわんばかりに、再び訓練に没頭した。

ねんりん①

西能病院のあゆみ

はじめに

雪が舞うお彼岸入りの日、昭和三十七年三月二十一日、西能整形外科医院が富山市星井町で産声をあげた。病床十床、職員八人という小さい世帯でも、北陸では最初の整形外科単科の医院だ。

当時のことを振り返りながら西能院長は「まだ三十三才の若輩で、いまのような地域医療を考えていたわけでもなかった。ただ、挑戦して自分の力を試したいという里純な動機からスタートした」と述懐する。

それから十八年の歳月が流れた。世の中が変ったが、医院も生まれ変わって、大きく伸び育った。

現在は、富山市五福で鉄筋四階建てに病床百十六床百五十五人の大世帯になった。そして、「医療法人財団五省会」として、どっしり地域社会に根をおろした。

「求められる地域の人々に、より良いでもなかった。医療を提供し、この世になくてはならない病院として存在意義を持たねばならないというのが私の終生の悲願です」（西能院長）

富山市星井町で開設した西能整形外科医院

「西能病院のあゆみ」を連載するにあたり、この十八年間のプロフィールをながめてみよう。

△昭和三十七年八月、労災保険医療機関に指定。

△三十八年九月、県下病院に先がけて救急車（ブリンス）を購入、画期的な業績として注目された。

△三十八年十二月、富山市五福に西能整形外科病院を開設（18室、47床）。

△四十年四月、病院第二期増築工事（鉄筋コンクリート三階建て塔屋一階）完了（27室、77床）。

△四十一年十二月、二台目の救急車（ジープ）を購入。

△四十二年三月、患者通院用のバスを購入。

△四十四年八月、病院第三期増築工事完了（34室、186床）

△同月、リハビリテーション部が完成。県下では初めての試み。

△四十六年三月、原子爆弾被爆者一般病医療機関に指定。

△四十七年十二月、外来及び診療、医事部門の改装工事完了。

△四十八年七月、X線テレビ装置を設置。

△四十九年一月、身体障害者福祉法の規定による更生医療を担当する医療機関の指定。

△五十年二月、リウマチクリニックを開設。

△五十年五月、社会福祉協議会西能基金の寄付で、西能病院長に紺綬褒賞が授与。（四十九年から毎年百万円を寄付）

△五十二年四月、職員寮建設工事完了（収容人員22人）

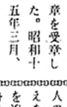
五十二年九月、西能副院長海外留学

草分けの業績

救急車とリハビリに

秋の生存者叙勲で、西能病院総婦長、古沢宮美さん（五六）＝小杉町戸破＝が、勲六等宝冠章を受章した。昭和十五年三月日本赤十字社富山支部病院を退職、この間、看護精神一筋に打ち込んできた献身的な努力が報われたもの。

勲六等宝冠章の栄誉に



医療、健康問題についてのご意見、原稿、を募集します。健康相談（手紙又は葉書）に毎週掲載。宛て先は富山市五福一二二〇、西能病院内新聞係まで。

わたしはこう思う

耐えぬいた訓練かみしめ…

社会復帰の喜び

大地を踏む ①

「子どもたちの幸せを生き甲斐にしています」という黒瀬さん夫婦と乳児たち

きびしいリハビリテーションの訓練を克服して退院、社会復帰できた人たちの喜びは大きい。しかし、完全に治ったとは、いいきれない。さらに自立の自宅訓練がつづくのだ。私たちは、いつも温かい励ましの言葉をおくろう――。

大沢野町地内の小っさい乳児専門の保育園〝青い鳥〟。黒瀬由美男さん（園）は、〝キャッ、キャッ〟オモチャとたわむれる乳児たちにかこまれて満足そう。奥さんの浩子さん（三六）は、かいがいしくホスト役だ。

黒瀬さんが西能病院を退院したのは三月二十八日、のため西能病院に入院したのが七月六日。左片麻痺で左の手足が不自由、やっと歩ける状態。きびしい手足の訓練がつづいた。

「はじめは屈伸訓練で手足が痛く苦しかった。だんだん、よくなってくると希望がわいてきた。みなさんが親切だったことも私を勇

乳児にかこまれ 続ける自立のリハビリ

すぐ自宅敷き地で四月一日に開園した。「〝青い鳥〟は私の夢だった。だから夢我夢中でリハビリの訓練に励んだ。いつ退院してもいいといわれた時はとび上る程嬉しかった」。

外国航路の船員だった黒瀬さんは、休暇で帰省中の五十二年二月のある夜、家の中で脳出血で倒れた。救急車で富山市民病院に運ばれて手術し、三週間は意識不明だった。リハビリ訓練

気づけた」という。やがて一人前に歩けるようになった。ブラブラしていた左手が肩まで持ちあげられるようになった。退院まで二年九カ月のながい辛棒だった。

黒瀬さんの自宅での朝は早い。起きるとすぐ左手を上下する訓練だ。散歩もかかさない。夕方にも時間をかけての手足の訓練の反ぶくだ。自立心の教訓を守って生きぬくため、しっかり大地を踏む。

作業療法に励む松下さん

私は昭和五十二年七月二十四日、首の骨を折り西能病院に入院しました。七カ月後に障害者手帳が交付されました。「体幹の機能障害により座居不能」と銘記されていました。座ることができず、三十三才にして生涯寝たきりと、宣告されたのです。二年八カ月の入院生活でした。

そして、いま私は中国山脈の近く作州盆地の一郭にひっそりと建つ社会福祉法人重度身障者施設「みすず荘」で生活しています。今日までの私は、過去から逃避して暮らし、気持ちを糊塗して…。そんな私が、西能病院でのリハビリ、友人、家族のすべてを思い出す日がきました。

私は、今ちょっぴりセンチになって院長や母を語りたい気持ちでいっぱいです。受傷の前の私は社会に順応できず、時には多額な金の無心を母に強い、乱暴者で覚醒剤を常用し、親孝行、法律などは何処か遠い外国語の如く考えていました。

入院して初めて迎えた正月。とにかく独りぼっち。枕辺に二合入った酒徳利と杯。「貴方が求めると毒です。毒でも私が処方するとクスリです」。そういって院長はお年玉にクスリを。

そのころ、他の患者たちは私の強制退院を強く申しでていました。しかし院長は「ご縁のある限りお世話しましょう」と、自分の手で爆弾を懐へ迎え入れたのです。

病院で暴れる不肖の息子を人前で詫びる母、ひたすら地蔵参り。度々病院に息子の安否を問う母に、職員は「元気に頑張っています」と手紙を書き、慰してくださった。

〝美しいものが見えてきた〟

人の美しい嬉いものは、ながいながい時を経て、ある日突然見えてくるものです。それは目でなく、もっと何かで……。

今、私は施設中を車椅子で走り回り、リハビリをし、コーラス会で唄い、誕生会を祝ってもらっています。自分の手で喫煙し、僅かの時間の手内職で社会に接し、そんな生活を楽しんでいます。面会には、遠くから友も母妹もきてくれます。励ましの便りも沢山、嬉しいですね。

私の母は「最近は医は算術という人もある、それは違う、やっぱり仁術やった」「人情紙の如しというけど、そうやなかった」と、感謝しています。

息子の不具を哀します、笑い顔が戻ったと喜ぶ母です。

大切なものを多く私に授けてくださって本当にありがとうございました。もし暇ができたら、少し私を思い出してください。

西能病院ご一同様

津山市瓜生原362の1みすず荘13号室　松下　英勝

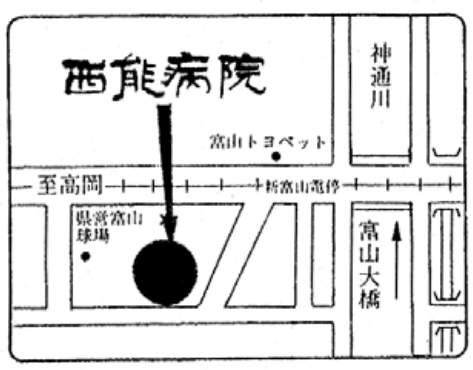
医療法人　西能病院の診療体制

急患受付時間

- 年中無休・24時間受付の診療体制を敷いております。
- 救急車（２台）は、要請により出動致します。

一般受付時間（日曜・祭日は休診）

診療科目	午前	午後
整形外科	毎日 8：30～12：00	月・水・木・土（火・金は休診） 16：00～19：00
リハビリテーション科	毎日 8：30～12：00	月・水・木・土 13：30～19：00 火・金 13：30～17：00
内科	火・金・土 8：30～12：00	
形成外科	毎月１回 8：30～12：00	（診察日は受付でおたずねください。）



◆ 医療コンサルタント　（毎週土曜14：00～16：00）

新たに医療相談日を設けました。（院長、又は副院長が相談にあたります。）整形外科の病気はもちろん、関連ある色々な病気について治療・予防のためのアドバイスを致します。又ご希望があれば専門の医師への紹介も致します。お気軽にご利用下さい。事前に、受付に時間予約をして下さい。（ＴＥＬでも可）

◆ メディカル・ソーシャルケースワーク

（毎日８：30～17：00）

医療費や入院などにかかわる経済問題・退院後の生活設計など、病気以外の心配事や悩みに専門のケースワーカーが親身になってご相談に応じます。（秘密厳守）ご遠慮なく、受付や看護婦に申し出て下さい。

◆ 栄養指導　（毎週土曜13：30より）

現代病といわれている肥満・糖尿病・その他の病気にたいして、専門の栄養士が理想的な食生活を指導致します。受付にお申込下さい。

◆ 重病患者さんの送迎について

重症のため、一般の車で搬送できない患者さんには、入退院にあたって、病院の患者運搬車をご利用いただけます。受付に申し出て下さい。

《交通機関》
市内電車……新富山電停下車・徒歩２分
地鉄バス……新富山停留所下車・徒歩２分
通院バス（順路）…西能病院→富山大橋→丸の内→新富町→富山駅→桜橋通り→西町→旅籠町→丸の内→富山大橋→西能病院
（は通院バス常時停留所、その他臨時停車します。）